

研究ノート

長島愛生園を訪れた人々－昭和 41 年から昭和 60 年まで－

People who visited National Sanatorium

Nagashima-Aiseien: from 1966 to 1985

山根 (吉長) 智恵¹⁾

Chie Yamane-Yoshinaga

キーワード：ハンセン病、隔離、解放、言語接触、言語生活

Keywords : Hansen's disease, quarantine of the patients, liberation, language contact, language behavior

1. はじめに

日本におけるハンセン病患者⁽¹⁾は、政府が施行した 1907 (明治 40) 年の「らい予防に関する件」という法律により、療養所への収容・隔離を余儀なくされることになる。それは、戦後の特效薬の出現により、治療可能な病へと変わっていても変わることはなく、1953 (昭和 28) 年に成立した「らい予防法」は、実質的には療養所への強制収容に近いものであった。しかし、戦前から療養所を訪問する人はおり、また 1958 (昭和 33) 年からはバスレク (バス旅行) で無菌の者はバスに乗って島外に出ることも許されるようになり、さらには社会復帰も可能となった。このように、療養所は隔離という形を残しつつ、入所者の外出を許すという意味での解放へと向かっていくのである。

筆者らの研究課題である「ハンセン病療養所入所者の言語生活」は、隔離された中で生活を送ってきた入所者の言語生活を調査・分析することで、現在長島愛生園 (以下、愛生園とする)・邑久光明園 (以下、光明園とする) の入所者に対する聞き取り調査結果を分析している段階である⁽²⁾。しかし、山根 (2014、2015) でも触れたように、戦前からこれらの療養所には多くの訪問者が訪れており、言語接触という観点からは、訪問者の状況についても調査しておく必要がある。本稿では、山根 (2015) に続き、1966 (昭和 41) 年から 1985 (昭和 60) 年までの愛生園の患者の言語接触の可能性を、園誌『愛生』の「愛

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

生日記」を分析することで考えてみたい。

2. 1966（昭和 41）年から 1985（昭和 60）年までの状況^③

この 20 年は、愛生園にとっても患者にとっても悲喜こもごもの時代であった。

まず、「悲」に関しては、自然災害が続いたことである。1974（昭和 49）年の集中豪雨では 41 室が避難を余儀なくされた。1976（昭和 51）年の台風 17 号の被害はさらに深刻で、未曾有の豪雨により、停電、断水、家屋倒壊、道路崩壊など甚大なものであった。1977（昭和 52）年には山火事も発生している。人的なものとしては、1972（昭和 47）年の両備バス配車拒否事件がある。この事件以前も、車掌や乗客が後遺症のある者の乗車を拒否したり途中下車させたりということは見られたが、これは岡山県庁へ陳情に出向くために契約しようとした際、「患者が乗るなら運行できない」と拒否されてしまった事件である。このように、1970（昭和 40）年代になっても、なお偏見は続いていた。

一方「喜」に関する最大の出来事は、長島架橋新設工事の起工式が行われたことである。わずか 30 メートルという距離であるにも関わらず、島と本土とを結ぶ交通手段は船しかなかった。橋を造ることは、患者たちにとって人間回復の証でもあった。1971（昭和 46）年、愛生園・光明園の両園自治会は、県道の延長としての架橋を求める意見書を、岡山県議会土木委員元浜貫一県議を通して提出し、9 月の定例県議会で採択される。翌年、両園自治会は長島架橋促進入園者委員会を組織し、1976（昭和 51）年、岡山県はその活動に応える形で、予算要求の重点項目として政府へ要望書を提出している。このような中、上記の不幸な台風被害が、逆に橋の必要性を認識させることになる。いくつかの特効薬によって保菌者率も減少し、高齢者も増えた^④この時期、「何とか橋を」の悲願の下、1980（昭和 55）年、両園の関係者は厚生大臣^⑤陳情・国会請願に上京する。そしてついに園田厚生大臣から、愛生園開園 50 周年の記念すべきこの年に、「強制隔離を必要としない証として実施したい」という確約を取り付けるのである。

この他、1967（昭和 42）年には患者自治会発足 20 周年、1970（昭和 45）年には愛生園創立 40 周年、1975（昭和 50）年には邑久高等学校新良田教室開校 20 周年、仏立宗開園 45 周年、1977（昭和 52）年には天理教誠心会館 20 周年、1978（昭和 53）年には真言宗大師堂開堂 30 周年、1979（昭和 54）年には老人クラブ創設 10 周年、1980（昭和 55）年には愛生園創立 50 周年、1981（昭和 56）年には曙教会創設 50 周年、真宗同朋会創設 50 周年、1982（昭和 57）年には盲人会創設 30 周年、川柳七草会創設 30 周年、1983（昭和 58）年にはロザリオ教会創設 30 周年の記念式典や行事が行われ、多くの来賓や関係者が園を訪れた。またこの時期、盲人会のハーモニカバンド「青い鳥楽団」が茨木病院、大阪朝日座、大阪府立厚生会館文化ホール、京都会館、名古屋市民会館、東京第一生命ホールなどで公演し、全国に知られることになる。1974（昭和 49）年には新良田教室の職員室への出入りが自由になり、里帰り^⑥や他の療養所との宿泊を伴う交流も盛んに行われた。

3. 訪問者の在住地域

それでは、訪問者はどのような地域から愛生園に足を運んだのであろうか。訪問者を居住地域別にまとめたものが、以下の表 1^⑦である。

ここから、愛生園の所在地である岡山県からの訪問者が 2,739、37.5%と、全体の 4 割

弱を占めていることがわかる。次に他地域と比べて群を抜いて多いのが近畿地方からの訪問者で、1,603、21.9%と2割強を占めている。そして、中国地方 540 (7.4%)、関東地方 404 (5.5%)、中部地方 332 (4.6%)、四国地方・九州地方 221 (3.0%)、海外 135 (1.9%)、東北地方 54 (0.7%)、北海道地方 13 (0.2%) と続く。

このように地域別に分けると、地元岡山県からの訪問者が多いだけでなく、中国地方や四国地方からの訪問者より近畿地方からの訪問者が多く、中国地方からの訪問者と比較しても3倍に上ることが見て取れる。これは、愛生園のある長島が岡山の東、東備地方にあり、近畿地方から来やすいこともあるだろうが、光明園ほどでないにしても、兵庫県や三重県など関西出身の患者が多かったことも一因であろう。関東地方からの訪問者については、療養所の管轄の厚生省、救癩団体である藤楓協会^⑧の本部が東京にあることなども関係していると言える。中部地方については、患者に愛知県出身者が多かったことも一因であると思われる。

結果、訪問者の約6割が岡山県と近畿地方で占められることから、患者との言語接触があったとしても、共通語以外に耳にした方言としては、岡山方言と近畿地方の方言が多かったことが推察される。

表1 地域別訪問者数

年	岡山	近畿	関東	四国	九・沖	中国	中部	東北	北海道	海外	その他	合計
1966	180	87	31	13	11	39	14	2	2	17	40	436
1967	228	109	27	19	17	36	17	5		15	46	519
1968	267	108	31	11	8	45	10	2	1	14	77	574
1969	230	105	30	16	13	33	13	3		7	90	540
1970	256	102	28	22	18	43	25	3	2	6	65	570
1971	305	74	23	10	20	34	25	2	1	9	55	558
1972	101	78	22	10	12	12	12	5	1	5	66	324
1973	120	76	23	12	19	26	23	5	1	5	53	363
1974	130	79	31	18	14	47	19	3	1	8	67	417
1975	104	61	15	7	13	39	16	2	1		63	321
1976	94	49	14	5	12	39	13	4		9	52	291
1977	85	64	25	8	16	17	16	2		6	42	281
1978	90	54	20	8	9	22	18	2		3	58	284
1979	78	74	14	6	11	18	10	1	1	2	56	271
1980	84	78	18	3	3	15	14	2		5	50	272
1981	81	87	11	8	8	14	13	3		8	33	266
1982	81	94	6	13	6	18	18	2	1	2	38	279
1983	78	80	10	9	6	17	21	1		5	35	262
1984	77	79	11	14	4	17	18	3		3	31	257
1985	70	65	14	9	1	9	17	2	1	6	30	224
合計	2739	1603	404	221	221	540	332	54	13	135	1047	7309
注1	「九・沖」:九州の各県及び沖縄											
注2	「中国」:岡山県を除く中国4県											
注3	「海外」:海外からの訪問者(国内在住の外国人を含む)											
注4	「その他」:在住地域不明											
注5	空欄は「訪問者なし」を意味する。表2、表3も同様											

4. 訪問者の所属機関・訪問目的

では、訪問者にはどのような職業の人が多く、また訪問目的はどのようなものであったのだろうか。本章では、訪問者の所属機関（職業）または訪問目的を、①学校（中学校、高校、専門学校、短大・大学関係者。教授、教員、学生、保護者など）、②宗教団体（神父、牧師、僧、キリスト教婦人会、仏教婦人会など）、③ハンセン病療養所・関係機関（療養所の医師・職員・患者、藤楓協会関係者、好善社⁽⁹⁾関係者、日本 MTL⁽¹⁰⁾関係者、交流の家⁽¹¹⁾関係者など）、④官公庁職員・研究所・議員（厚生省の職員、県の衛生部・予防課職員、市長、参議院議員・衆議院議員、民生委員⁽¹²⁾など）、⑤マスコミ（新聞社・放送局・出版社の社員など）、⑥短歌・俳句・川柳・詩・詩吟の会（指導者など）、⑦軍（軍政部関係者など）、⑧医療機関（医師、看護師、事務職員など）、⑨皇室、⑩慰問（歌手、舞踊関係者など）、⑪その他（婦人会、スポーツチーム、囲碁・将棋指導者、画家など）に分け、その数を以下の表 2 にまとめる⁽¹³⁾。

表 2 から見て取れるのは、まず、宗教関係者が 1,663、22.7% と最も多いことである。これは葬儀、布教、宗教行事催行のためで、特にキリスト教関係者と仏教関係者が突出している。カトリックについては、岡山カトリック教会関係者のボサール神父、ボーガルト神父、レンソン神父、ヴァンホーテ神父、直木茂神父、豊田尚臣神父、そしてベーゼル神父が複数年訪問している。日本人だがカルメラというシスター名を持つ稲光千賀子氏も、1979（昭和 54）年から 1985（昭和 60）年まで、京都から毎年訪問している。プロテスタント関係者については非常に多くの名前が見られるが、地元岡山から複数年訪れているのは玉島教会の河野進牧師、香登教会の高橋虎夫牧師、岡南教会の鈴木一郎牧師、石井教会の黒田四郎牧師、和気教会の大島常治牧師である。県外からの複数年訪問者はさらに多く、愛媛県にある三島真光教会の金田福一牧師、茨城県にある水海道教会の井沢記念男牧師、広島平和教会の植竹利侑牧師、アライアンス呉教会の小宮山林也牧師、京都市にある清和キリスト教会の小林繁樹牧師、在日大韓キリスト教大阪西成教会の金元治牧師、大阪府にあるいずみ教会の佐治良三牧師、静岡の杉山春市牧師がいる。

次にこの時期、仏教の中で最も多くの師を送っているのが真宗である。愛生園のある岡山県には真宗の寺院が少ないため、真宗本願寺派については、岡山県の寺院は広島側の備後教区か兵庫側の兵庫教区のいずれかに属している。その中でも多くは兵庫教区に属しているため、愛生園に出向いたのは岡山在住の住職以外では兵庫教区、特に十方会に属する住職が多かった⁽¹⁴⁾。岡山市から訪れたのは、光明寺住職で兵庫教区の教務所長まで務めた井上法順師で、20 年間毎年頻繁に訪れており、他に光善寺住職の長田智海師の名も見られる。兵庫県からは、太田唯念師、楠正則師、佐々木敏雄師、杉本正典師、西本昇司師、蓮清典師、久堀照世師、日野一雄師、松島法城師、松本重信師、本川智暁師、安井秀顕師、山田義雄師、和田智浄師などの名が見られる。そして 1980（昭和 55）年には西本願寺大谷嬉子前裏方、1981（昭和 56）年には大谷範子裏方も来園している。本願寺派以外では、多田慶男師、渡辺耕信師、大谷派・常念寺の赤松円成師の訪問が多い。

真言宗については、真宗のように訪問者数が多くなく、決められた担当者が訪問したようで、1966（昭和 41）年から 1972（昭和 47）年までは遍明院の黒井泰然師、1973（昭和 48）年から 1985（昭和 60）年までは光明院の藤田旭現師の名前が見られる。いずれも愛生園の位置する瀬戸内市にある寺で、園に近い寺院が訪問の役割を担っていたことが窺

える。また、1977（昭和 52）年には、高峰秀海管長も記念法要のため来園している。この他、日蓮宗では岡山市にある本成寺の井藤太然師が、1979（昭和 54）年から 1985（昭和 60）年にかけて毎年訪れている。禅宗については、岡山市国清寺の華山恵光師、岡山藩主池田家の菩提寺である曹源寺の横井一保師の名前がある。臨済宗妙心寺派管長で花園大学の学長も務めた山田無文師も、1971（昭和 46）年、1982（昭和 57）年から 1985（昭和 60）年を除き、毎年訪れ、講演会も行っている。天理教については、1950（昭和 25）年から訪問を続けているが、この時期、岡山教務支庁長植田五郎師が 1979（昭和 54）年まで（1978（昭和 53）年を除く）、次いで息子の植田慶三師が 1985（昭和 60）年まで毎年訪れている。

興味深いのは仏立宗で、1960（昭和 35）年から来園しており、この時期も毎月のように訪れているが、ほぼ年に 1 回はカラオケ、漫才などの慰問を目的としたものがあり、その中には当時人気の芸能人による幹旋慰問演芸もあった。1967（昭和 42）年にはアチャコ氏、1969（昭和 44）年には高田浩吉氏、1970（昭和 45）年には平和ラッパ・久丸氏、1976（昭和 51）年には桂米朝氏、1979（昭和 54）年には夢路いとし・こいし氏が慰問演芸を行っている。

この時期、宗教関係者と並んで多いのが、官公庁からの訪問者で、1,658、22.7%を占める。関係省庁の厚生省からは、1980（昭和 55）年には園田直厚生大臣、1982（昭和 57）年には森下元晴厚生大臣、1983（昭和 58）年には林義郎厚生大臣が訪れている。これは、架橋が前向きに検討されるようになり、視察を目的とするものでもあった。架橋問題に対しての話し合いもしばしば行われたため、特に岡山県議会議長を務めた元浜貫一氏は、1974（昭和 49）年から毎年のように訪れている。

また学校関係者については、以前から視察や交流などでの訪問者が多かったが、この時期も 1,330、18.2%の割合で訪れている。ただし、愛生学園（裳掛小・中学校第 2 分校）が小学校は 1965（昭和 40）年 3 月に、中学校は 1968（昭和 43）年 3 月に閉鎖になったことから、児童や生徒の訪問は皆無である。高校生の訪問も少ないが、新良田教室があるため、山陽学園関係（山陽女子高校）も 1970（昭和 45）年に一度訪問しており、他の高校の中にも新良田教室の生徒と交流している学校がある。代わって激増したのは看護学校（准看・高看、病院・大学付属・専門学校など）からの訪問者である。岡山、近畿地方（兵庫、大阪、奈良、和歌山、京都、滋賀、三重）、中国地方（広島、山口、島根、鳥取）、四国地方（愛媛）だけでなく、中部地方（愛知、石川、岐阜、長野、富山）、九州・沖縄地方（福岡、佐賀、沖縄）、関東地方（東京、神奈川、千葉、群馬）、東北地方（福島）と、多くの県から見学者が訪れている。また大学については、治療に訪れた岡山大学の医師以外では、ほぼ毎年奈良女子大学点訳クラブの学生が訪問している。

それ以外は、920、12.6%の療養所関係者、371、5.1%の医療関係者、249、3.4%の短歌・俳句・川柳・詩・詩吟の指導者、125、1.7%のマスコミ関係者、102、1.4%の慰問関係者である。その他の 889、12.2%には囲碁・将棋の指導者、画家・写真の指導者（コンテストの審査員）、「念ずれば花ひらく会」⁽¹⁵⁾の結成者である北野資子氏、日本舞踊の花柳徳三尾氏⁽¹⁶⁾、婦人会、共同募金会、ゲートボールチームなどが含まれている。主な訪問者に俳句の梶井枯骨氏、近藤忠氏、草間時彦氏、川柳の大森風来子氏、詩の上林猷夫氏、長瀬清子氏、短歌の大岩徳二氏⁽¹⁷⁾、奥谷漢氏、小林貞男氏、詩吟の木崎稲穂氏、武田勝正氏、

写真の葛原茂樹氏、囲碁の瀬川良雄氏、関西将棋連盟の角田氏、森安氏、北村氏、吉本新喜劇の山田すみ子氏、別家藤間流の藤間竹遊氏⁽¹⁸⁾がおり、他にキリスト教歌手の湖美芳氏、小説家の田宮虎彦氏、講釈師の田辺南鶴氏、歌手の竜鉄也氏の名前が見られる。また、1977（昭和 52）年にはハンセン病治療薬プロミンの合成に成功した石館守三氏、当時聖路加看護大学学長だった日野原重明氏が、1978（昭和 53）年には現在 AMDA（Association of Medical Doctors of Asia）グループ代表で当時は岡山大学の学生だった菅波茂氏が、1981（昭和 56）年には当時ノートルダム清心女子大学の学長だった渡辺和子氏が訪れている。1970（昭和 45）年、1980（昭和 55）年の愛生園創立 40 周年、50 周年記念式典には、藤楓協会総裁の高松宮同比殿下も出席されている。

表 2 所属機関・目的別訪問者数

年	学校	宗教	療養所	官公庁	マスコミ	短歌	軍	医療	皇室	慰問	その他	合計
1966	101	84	33	101	11	2		35		4	65	436
1967	121	96	81	111	10	6		33		5	56	519
1968	132	101	101	107	3	6		43		7	74	574
1969	118	98	132	86	7	4		31		7	57	540
1970	133	92	120	113	21	5		38	1	3	44	570
1971	120	94	136	110	4	4		29		6	55	558
1972	51	92	25	82	6	6		9		7	46	324
1973	79	68	43	95	8	5		16		4	45	363
1974	74	100	37	127	7	5		10		4	53	417
1975	51	90	23	92	3	4		14		4	40	321
1976	34	54	27	91	8	7		47		3	20	291
1977	50	68	30	67	4	10		20		3	29	281
1978	35	63	27	76	10	30		20		2	21	284
1979	22	70	24	59		43		10		8	35	271
1980	21	88	14	62	5	34		9	1	6	32	272
1981	33	87	23	55	10	18				5	35	266
1982	40	83	11	59	6	23		1		3	53	279
1983	41	76	5	68		16		2		9	45	262
1984	38	78	15	61	2	15				2	46	257
1985	36	81	13	36		6		4		10	38	224
合計	1330	1663	920	1658	125	249		371	2	102	889	7309

5. 1931（昭和 6）年から 1965（昭和 40）年までの訪問者との比較

本稿の第 3 章、第 4 章では、1966（昭和 41）年から 1985（昭和 60）年までに愛生園を訪問した者の居住地、機関・目的を見てきた。それでは、それらと山根（2014、2015）で分析した 1931（昭和 6）年から 1965（昭和 40）年までのデータの傾向に相違は見られるのだろうか。合計数の比較を行ったのが表 3 である。

ここから、まず訪問者数が非常に増加していることが見て取れる。山根（2014）を第 1 期、山根（2015）を第 2 期とすると、訪問者数の合計はそれぞれ 2,701、4,412 であるので、第 1 期と比較すると 2.7 倍、第 2 期と比較しても 1.6 倍もの人々が訪れていたことになる。1971（昭和 46）年までの訪問者の中には岡山大学から診察に来ていた医師が含ま

れるため、その人数分多くなっているとはいえ、有菌者数が減少したこと、偏見は残っていたとはいえ、病気に対する恐怖感がなくなったこと、架橋問題などでクローズアップされたことなどが訪問者数増の理由だと考えられる。

地域別に見ていくと、第 1 期、第 2 期と比較し、いずれも本稿の時期の訪問者数が上回っている中、唯一減少しているのが「海外」からの来訪者である。しかし、これは、外国人神父の減少が主な理由で、逆にこの時期、特にこの病気に対して日本と関係の深かった韓国・台湾からは、韓国国立らい病院（小鹿島）の医師、韓国救らい協会関係者、台湾楽生院関係者などが訪れており、また療養所には在日韓国人も多かったことから、1980 年前半（昭和 50 年後半）には、在日本大韓民国居留民団関係者、朝鮮総連関係者、在日韓国キリスト教関係者も来訪している。

訪問者の機関・目的については、上述したように、看護学校からの見学者が増えたため、小学校・中学校・高校からの訪問者減少を上回る結果となり、学校関係者の伸びが大きい。療養所間の交流も進んだため、ハンセン病関係者の訪問者の割合も伸びている。逆に宗教関係は、総数では最も多いが、他の機関・目的の伸びが大きかったこともあり、割合は減少している。また、戦後 20 年が過ぎたことから、軍関係者の来訪は見られなくなり⁽¹⁹⁾、皇室の来訪も 2 回に止まっている。慰問の来訪者も減少しているが、これは愛生園で暮らす人たちの人数が減少したこと⁽²⁰⁾、その人たちの中に里帰りなどで楽しむ方法が生まれたこととも関係していると言える。

結果、言語接触という点から見ると、療養所内での交流では岡山方言と近畿地方の方言が主だったとしても、療養所の外に出る機会が増えたことにより、様々な方言に触れる可能性があったと考えられる。

表 3 地域別、所属機関・目的別訪問者数比較

地域	1931-1944		1945-1965		1966-1985		機関	1931-1944		1945-1965		1966-1985	
	総数	%	総数	%	総数	%		総数	%	総数	%	総数	%
岡山	804	29.8	1538	34.9	2739	37.5	学校	269	10	509	11.5	1330	18.2
近畿	341	12.6	719	16.3	1603	21.9	宗教	699	25.7	1246	28.3	1663	22.7
関東	185	6.9	265	6	404	5.5	ハンセン	266	9.9	360	8.2	920	12.6
四国	95	3.5	138	3.1	221	3	官公庁	584	21.6	887	20.1	1658	22.7
九・沖	83	3.1	62	1.4	221	3	マスコミ	53	2	96	2.2	125	1.7
中国	77	2.9	266	6	540	7.4	短歌	49	1.8	199	4.5	249	3.4
中部	62	2.3	115	2.6	332	4.6	軍	47	1.8	22	0.5		0
東北	20	0.7	10	0.2	54	0.7	医療	39	1.4	138	3.1	371	5.1
北海道	3	0.1	3	0.1	13	0.2	皇室		0	12	0.2	2	0
海外	192	7.1	291	6.6	135	1.9	慰問	193	7.1	242	5.5	102	1.4
その他	839	31	1005	22.8	1047	14.3	その他	502	18.7	701	15.9	889	12.2
合計	2701	100	4412	100	7309	100	合計	2701	100	4412	100	7309	100

6. まとめと今後の課題

本稿では、園誌『愛生』を基に、1966（昭和 41）年から 1985（昭和 60）年までの訪問者と愛生園で暮らす人たちとの言語接触の可能性について考察した。今後は、1986（昭和

61) 年以降の『愛生』の分析を行い、訪問者との言語接触の可能性の面から引き続き考察を行うとともに、インタビュー調査の結果をさらに詳しく分析することで、インタビューデータと文献データの両面から、入所者の言語生活を明らかにしていきたい。

付記

本稿は、科学研究費（挑戦萌芽）「ハンセン病入所者の言語生活」（26580085）の研究成果の一部である。

謝辞

本稿執筆にあたり、浄土真宗本願寺派関係者（岡山市にある源照寺の住職、十方会関係者、兵庫教務所関係者）、関西将棋会館関係者にはお世話になりました。記して御礼申し上げます。

注

(1)本稿では、基本的に、療養所に有菌者がいる場合は「患者」、無菌者のみになった場合は「入所者」を使用する。また、ハンセン病は1996（平成8）年の「らい予防法廃止法案」施行以前は「らい病」と呼ばれていた。その「らい」の表記に関しては、法案などでひらがな表記をしているものについてはひらがなで、漢字表記にしているものについては漢字で表記した。

(2)調査結果の一部は『日本語の研究』第12巻4号p.202参照。

(3)本章については、国立療養所長島愛生園（1981）、長島愛生園入園者自治会（1982）、佐川・大竹・成田編著（2002）、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編（2009）、国立療養所邑久光明園入所者自治会編（2009）、国立療養所長島愛生園（2010a、2010b）、園誌『愛生』などを参考にまとめた。

(4)「基本治療科から（第2治療棟看護婦一同）」（『愛生』1974（昭和49）年9月号）によると、1969（昭和44）年は入園者数1,359人に対して有菌者数が339人（24.94%）であったが、1972（昭和47）年は入園者数1,249人に対して有菌者数は244人（19.53%）と減少している。また、国立療養所長島愛生園（1981）pp.112-113によれば、1979（昭和54）年12月31日時点で、患者数1,093人のうち61歳以上が496人（45.38%）で、5割近くを占めている。

(5)当時は厚生省だったので、厚生大臣。厚生省は現在の厚生労働省。

(6)おもに各県がバス代などを負担し、郷土を見学した行事。長島愛生園入園者自治会（1982）pp.171-172参照。

(7)同日に同地方から来ている場合、複数名であっても「1」と数えた。複数名の居住地域が判明しており、それが異なる場合は、それぞれの居住地域に分けて数えたが、複数名のうち1名のみが判明している場合は、その判明している地域で数えた。在住地域が異なる者が会議等で来園している場合は、地域ごとに数えたが、全国会議のような場合は「その他」として数えた。なお、本稿執筆段階で居住地域が判明していない者や来園目的が不明な者については「その他」に含めているため、今後の調査で在住地域等が判明した場合、表1、表3の数字に変更が生じる可能性がある。

(8)らい予防協会の事業を受け継いだ協会。山根（2015）、注(7)参照。

(9)ハンセン病国立療養所でワークキャンプを行い、入所者との交流を続けている団体。山根（2015）、注(10)参照。

- (10)救らい協会のこと。ハンセン病患者とその家族を支援するキリスト教団体。山根 (2015)、注(11)参照。
- (11)奈良市にあるらい復権セミナーセンター。 <http://www.mognet.org/fiwc/musubi.html>、<http://www.asahi-net.or.jp/~fi2k-skge/musubi.html> 参照。
- (12)各地域において、ハンセン病の情報を収集したり、患者やその家族の相談に乗ったりした人。
- (13)大学の医学関係の教授、ハンセン病療養所・官公庁に勤務する医師・看護師などが訪問している場合は、「医療機関」ではなく、「学校」「ハンセン病療養所」「官公庁」に含めている。学生などが慰問で訪れ、「慰問」と書かれているものについては「慰問」に含めている。職業や目的がはっきりしない訪問者は「その他」に含めている。なお、今後の調査で所属機関や目的が判明した場合、表2、表3の数字に変更が生じる可能性がある。
- (14)真宗本願寺派の状況は、岡山市にある源照寺住職への聞き取り調査、兵庫教区、十方会への問い合わせにより得られたものである。なお、十方会とは十方会布教団のことで、1954(昭和29)年、兵庫県宝塚市において誕生した。真宗の常例布教などを行っている。<http://onenbutu.com/> 参照。
- (15)ハンセン病患者への奉仕活動を行ったグループ。特に「青い鳥楽団」の園外演奏会に尽力した。長島 愛生園入園者自治会(1982) pp.281-283、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編(2009) p.710-713 参照。
- (16)「小島をバラ園にする会」の代表でもあった。
- (17)アララギ派の歌人。短歌雑誌『炎々』主宰者。山陽学園短期大学で1969(昭和44)年から1981(昭和56)年まで勤めた。山陽学園短期大学名誉教授。
- (18)この時期、毎年のように慰問で来園している。藤間(2006) pp.144-153 参照。
- (19)この時期、傷痍軍人会の来訪者はいるが、軍関係には含めていない。
- (20)1966(昭和41)年の患者数は1,472人、1985(昭和60)年は955人である。国立療養所長島愛生園(2010a) p.21 参照。

参考文献

- 大岩徳二(1970)『岡山文庫33 岡山文学風土記』日本文教出版社
- 大嶋得雄(1996)『約束の日を望みてー長島曙教会創立65周年記念誌ー』長島曙教会
- 岡山カトリック教会創立百周年記念事業実行委員会百年史部(1983)『岡山カトリック教会百年史』岡山カトリック教会
- 岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編(2009)『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・後編』岡山県
- 岡山県歴史人物事典編纂委員会編(1994)『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社
- 岡山日日新聞社(1986)『岡山日日新聞社創刊40周年記念 岡山県人名録』岡山日日新聞社
- 邑久光明園入園者自治会(1989)『風と海のなかー邑久光明園入園者八十年の歩み』日本文教出版
- 神谷美恵子(1980)『神谷美恵子著作集2 人間をみつめて』みすず書房
- 神谷美恵子(1982)『神谷美恵子著作集10 日記・書簡集』みすず書房
- 川端定三郎(1998)『岡山文庫195 岡山・備前地域の寺』日本文教出版社
- 国立ハンセン病資料館編(2013)『国立ハンセン病資料館常設展示図録2012』国立ハンセン

ン病資料館

- 国立療養所邑久光明園入園者自治会編（2009）『邑久光明園創立百周年記念誌「隔離から解放へ」－邑久光明園入園者百年の歩み－』山陽新聞社
- 国立療養所長島愛生園（1981）『長島愛生園創立 50 周年記念誌』国立療養所長島愛生園
- 国立療養所長島愛生園（2010a）『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌 [第一部] 80 年を迎えて』国立療養所長島愛生園
- 国立療養所長島愛生園（2010b）『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌 [第二部] 振り返れば 80 年』国立療養所長島愛生園
- 佐川修・大竹章・成田稔編著（2002）『ハンセン病資料館』高松宮記念ハンセン病資料館運営委員会
- 山陽新聞社編（1989）『岡山県人名鑑』山陽新聞社
- 寺院名簿編纂委員会編（2000）『浄土真宗本願寺派寺院名簿』浄土真宗本願寺派浄土真宗本願寺派十方会 <http://onenbutu.com/>（2017 年 2 月 5 日閲覧）
- 長島愛生園入園者自治会（1982）『隔絶の里程－長島愛生園入園者五十年史－』日本文教出版
- 長島曙教会（1996）『約束の日を望みて－長島曙教会創立 65 周年記念誌－』長島曙教会
- 藤間竹遊（2006）『槿花一朝夢』星湖舎
- 交流の家 <http://www.asahi-net.or.jp/~fi2k-skge/musubi.html>（2017 年 2 月 5 日閲覧）
- モグネット <http://www.mognet.org/fiwc/musubi.html>（2017 年 2 月 5 日閲覧）
- 森安美保（2015）「記憶の一端－長島愛生園－」『オリーブグリーン』第 3 号
- 山根智恵（2014）「長島愛生園を訪れた人々－昭和 6 年から昭和 19 年まで－」『山陽論叢』第 21 巻
- 山根智恵（2015）「長島愛生園を訪れた人々－昭和 21 年から昭和 40 年まで－」『山陽論叢』第 22 巻
- 山根智恵・久木田恵（2016）「ハンセン病療養所入所者の方言受容」『日本語の研究』第 12 巻 4 号 p.202

分析資料

- 『愛生』愛生日誌 1966（昭和 41）年 4 月号～1986（昭和 61）年 2 月号（ただし 1971（昭和 47）年 1 月のみ資料なし）